

※こちらの二次創作作品は『五等分の花嫁』原作の内容から一部改変を施した IF ストーリーになります。IF ストーリーが苦手な方は閲覧非推奨になりますので、ご了承ください。また、本作品は各章に日数が記されております。この日数がシークエンス描写に繋がっている点に着目して頂けると、よりお楽しみいただけると思いますので是非！

もう、我慢しないよ

## 第零章 肉結びの伝説 四百日目

「はふーっ、ぜえ…ま、待って、フータロー…」

もう卒業間近だというのに、私は今日も遅刻ギリギリの時間に家を出る。始業のチャイムが鳴るのは八時半。今の私が頑張って七時四十分にはマンションを出ないと、多分校門を通るくらいのタイミングで予鈴が鳴ってしまう。前はもう少し遅くても良かったんだけど、今はもう無理。現実はずっと「マンションの出口でガラスのドアに映る私」が教えてくれる。また胸、大きくなっちゃった。太腿も太くなりすぎてストッキング越しに見てもブヨブヨ。前から分かった事だけど、いい加減 10L の制服じゃあお腹も胸も隠せてないし。でも私のサイズに合う制服なんてこれ以上は更に特注するしかないから、今の制服が着れなくなるまでは我慢する。面倒くさいのもあるけど、フータロー以外の人に採寸されるのは今でも恥ずかしい。

「おい三玖！まだ 100m しか進んでいないぞ！」

私の言葉に振り返って強めの語気でそう言うてくるフータロー。いつも朝は六時半に私を起こしに来てくれて、着替えとか身の回りの事とかを手伝ってくれる。私と彼が付き合い始めたのはもう数か月前のことになるけど、全然マナー化はしていない。フータローは私に鼻水の入っていない抹茶ソーダを奢ってくれたあの日から今日まで、ずっと変わらない大事な人。

「も、もう、ぜえ…ふはあ…げ、限界…」

ドスッ…ドスッ…、数秒に一歩やっとなんか脚を前に出して進むことができる。それこそ前だったらフータローと競走してもどっこいどっこいの足の速さだったり体力だったりしたけど、今じゃちょっと速く歩くフータローに追いつくだけでも一苦勞。足が地面に着くたびに上下左右に揺れる胸が付いたこの身体を、なんとか倒れないように堪えながら、めいっばいの空気を吸っては吐いてで追いかけるしかない。べっとりとした脂汗が、顔の肉で膨らんだ頬を流れ落ちる。きっと学校に着く頃には汗臭い。

「…ほら、このタオル使えよ。少し急ぎ過ぎたな、すまん」

「あ、ありがとう…。ふう…ふはっ、あの…フータロー。多分だけど…」

「どうした、また破れたか？だったらすまんが、学校の空き教室で…」

たった 100m そこらを走っただけでもう息が上がってしまう私にフータローは駆け寄っ

てきてくれる。昨日一昨日が休日だったから体力が落ちて走るのもしんどい。そんなことは私たちの間では日常茶飯事。でもこうして呆れる事なく私に寄り添ってくれるフータローはやっぱり優しい。女の子なのにタオルが吸いきれる限界まで汗をかいてしまう私とは正反対の体型だけど、周りの目なんて気にしない彼の事が私はやっぱり好き。だから、休み明け早々から遅刻しそうになっている理由はちゃんと彼に伝えないと。

「ううん、そ、それもそうだけど違う。そうじゃなくて、多分私、また太っちゃった…」

未だに「太っちゃった」という言葉が自分の口から出る度に、この贅肉の内側にある胸の辺りがゾクゾクする。太っているのは私自身だというのに、きっとフータローの反応が分かっているから、昔のような自己嫌悪じゃなくて今は少し興奮してしまっているんだ。

「そ、そうか…！ま、まあ、二乃の奴もクッキー大量に作ってたしな！五月があんなにガツガツ食ってたら、そりゃ三玖だって食いたくも…」

「うん…ちょっと我慢できなかった。それに夜中だつてつい残ったクッキー食べちゃったし…」

フータローの顔がどんどん赤くなってく。また食べちゃった私を正当化しようとしてくれてるんだね。たまには刺激も必要だと思うから、もう少しだけアタックしてみる。じゃないとそれこそ二乃あたりが隙を突くように間に割って入ってきそうだから。

「…フータローは、私がこれ以上太ってもいいと、思う…？」

私に足並みを合わせてゆっくり歩いてくれる彼に、ちょっと大胆であざといかもだけど私の身体を触れさせる。自分じゃ足元が見えないくらいに膨らんだこの身体は全身が凄まじい弾力と柔らかさを帯びていて、こうするといつもフータローは焦ってくれる。

「い、いいも何も、俺はお前の外見も…す、好きではあるんだが…健康でもいてほしいわけで…、お、俺はずっとお前の事を支え続ける覚悟はあるぞ！」

ふふっ、なにそれ、答えになってないとは思うけど。でも顔には出てる。人前じゃ決して口にはしてくれないけど、太り始めて今では 180kg もある私と一緒にいてくれる彼は、私のこの身体も含めて好きになってくれたんだ。他の人から見たら私なんて自堕落の塊だとか、自己管理もできない肥満女に見えるかもしれないけど、それでも貴方が私を求めてくれるなら、私はそれで満足だし幸せ。

「…ふう、少し落ち着いたし、いこっか、遅刻しちゃうし…ふうっ、はあ…」

そんな事を考えていたら、多少呼吸が楽になったからまた走り出す。歩くのとは違ってやっぱり走るのはお肉が揺れて辛いけど、今日はなんとなく頑張れそうな気がする。破れたストッキングも後でフータローに替えてもらわなくちゃ。また恥ずかしい所、見られちゃうな…。毎日着替えを手伝ってもらっているのに、足元から身体を覗かれるのだけは慣れない。私の身体、自分だと見下げたらほとんど胸で視界が埋まっているけど、下から見たら今はどんな感じになってるんだろう。フータローが好きでいてくれるくらいの肉付きだったらいいな。

そう思って今日も学校に向かう。もうすぐ三月。皆は私に気を遣って登校の時は二人きり

にしてくれるけど、普段はずっと一緒の私たち五つ子と、あの日突然私たちの前に現れた家庭教師くんの彼が過ごした高校生活もやがて終わる。出会ってすぐの頃は凄くギクシャクしてたよね。花火大会、今度は皆と行くのとは別で、君と二人きりでも行ってみたい。その時は浴衣、作ってもらわなきゃね。いろんな思い出があるけど、多分皆の中で私が一番変わった。自分に自信を持てるようになったのもあるけど、当然見た目的な意味でも。太り始めた頃はまさかここまで大きくなると思わなかった。思い出してみると凄く懐かしい気持ちになる。

ドスツ、ドスツという鈍く重い足音と共に、なんとか走り続けようとしている私はそう思った。

## 第一章① 肉結びの伝説 五十日目

「ん〜〜！！終わったあ！上杉さん、今日の課題終わりました！」

「私も。フータローに教えてもらった所だから、いつもよりスラスラ解けた気がする」

「そうですね、あまり褒めるのも癪に障りますが、貴方の腕は確かなようです」

林間学校が終わってもうすぐ二か月。私たちの高校生活ももう半分が終わっていて、気づけば折り返し地点。これからは勉強ももっと難しくなる。五人揃って卒業したいという気持ちとは裏腹に、ギリギリで持ちこたえているような状態は続いているけど、今日も家で勉強に励んでいる。

「よく頑張ったな。よし、じゃあ採点する間、お前らは休憩だ！ほら思う存分休め！」

昨日も徹夜で授業案とプリントを作ってくれたんだろう。フータローは徹夜ブーストもあってかいつにも増してテンションが高い。

「ほら丁度クッキーできたわよ、五月はこれ持ってって、それから四葉は着席！アンタには危なっかしくて運ばせられないわ。あーでも、布巾だけお願い」

「さらっと酷いこと言われてる…！？でも布巾係は必要だもんね！」

いつものように二乃にこき使われながらも、嫌な顔一つせずに四葉はこっちに戻ってくる。大皿に盛られた大量のクッキーを一枚も床に落として無駄にしまわぬよう恐る恐る運んでいる五月とは対照的に、その横をスツと追い越して席に着く辺り、この子は本当に動きが速い。

「何やってんの三玖、四葉に任せられない事、アンタが代わりにやらないでどうすんのよ。アンタは飲み物持っていきなさい」

キッチンから私を呼ぶ声がある。急かすようなその声に目を向けると、二乃が手招きしていた。そっか、ぼーっとしてた。勉強すると体力も糖分も使うから少しぼけっとしてしまう。最近は特に夜中に大河ドラマを見返してて寝不足だった、っていうのもあるかもしれない。

「あとは持ってくるものある？」

キッチンに用意されていたお盆の上には、仕事で出かけている一花以外の姉妹が好んで

いる飲み物と、たぶんフータロー用だと思われる水が置かれている。水に睡眠薬を入れてフータローに飲ませた事という前科のある二乃だけど、最近は少し角が取れてきた気がする。まあ二乃は私と好みも違うし、恋敵になんてならないだろうから良いんだけど。

「ないわよ、後は少しここ片付けてから私もそっち行くから、先に食べちゃっていいわ」  
エプロンで手を拭くと、二乃は洗った後のお皿や調理器具を拭いて片づけ始めた。ならお言葉に甘えて。少しでも出遅れたら五月と四葉にほとんど食べられちゃいそうだし。

「はむっ、ん〜！頑張った後の自分へのご褒美は格別だね！」

「ごっくん…そ、そうですね！つい食べ過ぎてしまいそうなくらいに…」

お腹周りを摩っては次の一枚を手取る五月は、この前皆に内緒でケーキを食べに行っていた事がバレたから、きっと今でも気にしてる。私はあんまり甘いのは得意じゃないけど、二乃や一花は行きたがっていたと思う。でもなんだかんだ争い事にならないって事は、今も私たちは姉妹として上手くやっていけてるんだろう。

「私も食べようかな」

フータローに水を届けてきたけど、採点と今後の計画(?)に集中していて私の事は眼中にないみたい。姉妹の分の飲み物をそれぞれの定位置に置いて、とりあえず私も席に着いた。実はちょっとお腹が空いていて、こうして小腹が満たせるクッキーはありがたい。抹茶とも相性がいいからクッキーは私にとっては当たりのおやつ。そうして私も、なんだかんだ一枚また一枚と食べる五月と、一方で一枚一枚ゆっくり頬張っている四葉に負けないようにクッキーを口に運ぶ事にした。

「はむっ、ほむっ…んっくん。あむっ…」

にしても、このごろ勉強が難しい。全部の授業が社会科だったらいいのに、sincostan だけならまだしも、logなんて出てきたら数学の教科書が呪文の本にしか見えない。他の科目もどんどん専門的な話になって、きっとフータローがいなかったら今の私はないと思う。

「…ごっく、ごっく…ぶはっ、あむっ…んぐっ、ごっくん」

「あ、あの…三玖？」

「はむっ、っくん…なに、五月」

珍しく五月が食べ物を前に手を止めて話しかけてくるから、私まで止まってしまった。

「きよ、今日はよく食べるのですね…」

まるでもう皿にほとんど残っていないのを見て、もっと食べたかったとでもいうかのような、そんな哀愁漂う顔で五月は私に言ってくる。大丈夫、いくら私が食べたってまだ全然残ってるはず…。

「え、あっ、そ、そうかな…」

さっきまで山のようにあったクッキーが嘘みたいにほぼ消えていた。四葉を見てもそんなに食べたような形跡はない。物惜しそうに言ってきた五月はまあ食べてないだろうし、二乃はまだキッチン。一花は帰って来てないから、残るは私しかいない。自分がそんなに食べたなんて信じられないけど、考え事をしながらだったらあり得るのかもしれない。缶に入っ

た抹茶ソーダもほとんど残ってなくて、机に置かれる缶の音は凄く軽かった。

「…！ちょ、ちょっとトイレ…！」

間違いない、私だ。無意識のうちにどどん口口に運んで、フータローがいるっていうのに、皿に盛られてたクッキーを夢中で胃袋に収めてしまったんだ。私はこの場に二乃が来た時の事を考えて逃げるしかなかった。もし二乃が、私がクッキーの大半を食べちゃった、なんて知ったら、きっと食べ過ぎを咎められるし、フータローにも怒る二乃の声が聞こえちゃう。そんな所を見られたら…そう思うと恥ずかしさと申し訳なさから席を外していた。

「なんで食べ過ぎちゃったんだろう…」

洗面台に備え付けられた鏡にまた問いかける。実はこれが初めてなんじゃない。この前もいつの間にかお昼ご飯の食べる量が増えていたり、気づけば新発売の抹茶ドリンクを何本も買ってしまったりしていた。自分でも気を付けるようにしているはずなのに、ちょっと気を抜くとさっきみたいに食べたり買いこんだりしてしまう。それに…。

「…少し痩せないと」

当然食べた分は身体に溜まっていくわけで。誰もいない事を確認して服を捲りパンツを下すと、下着にわずかながらお腹のお肉が乗っているのが一目で分かる。五つ子だからお互いの身体の事はよく知っているけど、きっと皆は私が太った事までは知らない。今までだってそれぞれよく食べる時期はあったし、食べても歳相応にカロリー消費も代謝でされていたから太ることはなかった。

けど、このプニッとした感触は今まで私が信じていた常識を覆してくる。

(三玖、なんだかお前だけ…丸くなったな…?)

「…はっ、んんん…！！」

不意に、このままブクブクと太り続けて肉団子みたいになった私からフータローが幻滅して離れていく姿を想像して悶絶しそうになる。それに、もしこのまま太りつづけて体重三桁になんてなったら、一花には苦笑いされそうだし、二乃にはフータロー以上に幻滅されそうだし。四葉には毎日介護まがいの事をされそうだし、五月には…食べ物をおすそ分けされそう…？いやいや、それどころじゃない。

「もし、フータローに身体を見せる事があったら…」

一緒にプールに行く事になったらどうしよう。二人きりでも怪しまれるのに、姉妹全員と彼で行く事になったら私だけ太いのが目瞭然。皆はちゃんとしているのに、私だけお尻も胸も無駄に大きくて、くびれも消えただらしのない身体になっていたら…。

「や、痩せないと…！絶対！」

ブラジャーのサイズも新しくして買い直さないとこの前から思っただけで、それどころじゃない。明日から絶対に食べ過ぎないようにして、できたら運動も…頑張っ、フータローに見られても良いような身体に戻さないと…！

一週間はあっという間だった。私はと言うと、正直全然痩せられていない。思えば「明日から」なんて考えていた時点で甘かったのだ。結局その日の内に夕飯はおかわりをし、二乃には冷めた目を向けられつつも茶碗によそわれたご飯を胃袋に収めてしまっていた。おやつにクッキーまで食べていたのだと聞かされた一花は、それでも食べる私を見て「まあいいんじゃない」と濁していた。

「で、なんだかんだ毎日食べてばかりで…」

湯気でぼやけてはいるが、風呂場の鏡に全身が映ると改めて自分が太った事を自覚する。へそは横に潰れ始めていて、太腿には隙間がない。たぶんこのままだとストッキングもキツくなってくる。胸も心なしか前より大きくなった気がするが、良い膨らみ方とは言えず無駄に大きくなっただけ。きっと急な体重増加で贅肉が付きすぎたんだ。顔もちょっと丸くなった。そう思うと身体全体がついこの前恐れていた通りの球体に近づいているような…。

「そ、そうだ、体重…！」

今までなんとなく避けてきたけど、このままだと本当にだらしのない身体になっちゃう。確か体重計は脱衣所の棚に仕舞ってあったから、すぐにでも引っ張り出して乗らないと。

私は急いでシャワーを済ませて風呂場から出た。チラチラと視界に入ってくる鏡の向こうの子は、動くたびに二の腕周りとお腹をプルプル震わせていて、あまり見たくなかった。それよりも早く体重を測ってしまわないと、次に入浴する姉妹が来てしまっただけで体重を測るところか、こんな締めりのなくなりつつある身体と焦る私を見られてしまう。一花や五月はさておき、四葉に知られたら間接的に皆にも知られそうだし、二乃に見られた時の事なんて考えたくもない。

「確かこの辺に…あっ！あった！」

半ば湿ったままの身体で体重計を探し出し、物音で姉妹に気づかれないようゆっくりと床に置く。体重計を起動させるとまず初めに個人データの呼び出しが画面に表示された。五人それぞれが個人のデータを一から五番で設定しているから、体重の増減も BMI も、筋肉の変化量まで自分の身体のあることが一目で分かる。

「お願いだから、そんなに太っていないで…」

ギギッ…

0.0kg から私が素足を乗せた段階で 10、20 と表示された数値が増えていく。30、40、50 …。その辺りから怖くなって目を閉じてしまったけど、計測終了を告げる機械音でうっすらと目を開けていく。5、6、6。56kg ならまだ良かった。

「ろ、ろくじゅ…ろく…」

たったの数週間で 15 kg 以上の増量。最後に測った時でギリギリ 40kg 台だったから 50kg を飛ばして一気に十の位の数が変わっているのを見て絶句する。これが自分の体重だなんて信じられず、ついもう一度乗ってみてもやはり変わらない。なんなら筋肉量は前より落ちていることまで分かった。運動しようと思ってただけで一度も運動という運動をしてこなかったのだ、当然と言えば当然。

「で、でも、そんな…」

テレビのダイエット番組でタレントさんが必死にダイエットをして一か月で痩せる量のお肉を、私はたったの2週間そらで身体に貯め込み膨らませていた。こんな現実、信じたくない。毎日会っている姉妹やフータローはまだ気づいてないみたいだけど、何かの拍子に絶対知られてしまう。床に崩れるように座り込み、水を垂らしてばかりの身体は思うように動かない。だけど脱衣所に向かって来る誰かの足音で我に返る。

「こ、今度こそ！きよ、今日はもう外に出たら怪しまれるし、明日の朝からランニングに行こう…！」

震える手で焦りながら体重計を元の位置に戻す。さっと床の水気をふき取り、この脂肪で一回り大きくなった身体にバスタオルを巻くと、脱衣所に来たのが五月で安心した。でも15kgも重いんじゃ、太ったってバレるのも時間の問題。

私は決意を新たにして、フータローといつかジムに行くことがあるかもと買っておいたスポーツウェアを今夜寝る前にタンスから探し出すと決めた。

## 第二章 肉結びの伝説 三百日目

「三玖～、早く起きないと遅刻するよ～お姉さんが起こしてあげよっか？」

「う、う～ん、今起きたから大丈夫…」

今朝は凄く久しぶりにだけど一花の声で目が覚めた気がする。普段は一花が一番起きるのが遅いのに、きっと明日は雪でも降るんだろう。8月や9月なんてまだまだ夏真っ盛りで暑いけど、これだけ珍しい事があったのだから、雪くらい降ってもおかしくない。っと、いつまでも寝ていたら夏休みが終わってしまう。あと数日しかない貴重な長期休み、できるだけテストで良い点を取ってフータローに褒めてもらえるように頑張らないと。ん、夏休み、あと数日…？

「っは！今日から新学期じゃ…」

カレンダー、スマホ、目覚まし時計の表示、どれを見ても今日は9月1日。全国的にも2学期の始業式が行われる日。それは私たちの学校も例外ではなかった。

「起きないと…！ふんっ、ぜえ…ふう…」

重たい身体を起こしてベッドから起き上がろうと地に足を付ける。そして膝に手をついて一息に立つ。ミシミシッというベッドのスプリングが軋む音はこのベッドの年季の入り具合を物語っている。気だるいけど、始業式から遅れて登校なんてしたくないから準備するしかない。今の時刻は7時25分。朝食は仕方なく抜くとして、今から急いで着替えて、身支度を済ませれば家を出る7時50分にギリギリ間に合う。

「ふう…あつっい、また汗かいちゃった」

夏なのにクーラーをかけ忘れて、朝から部屋は蒸し暑い。まるで大きな熱源でもあるような温度と過剰なまでの湿度で、パジャマまで寝汗で湿っている。普段はあんまり自分じゃ気づかないけど、流石に今朝のパジャマは少し臭い気がする。

「んっ、ふはっ、ふーう、んくっ…」

一つ一つパジャマのボタンをはずしていく。最近、どのパジャマも縮んだみたいでボタンを留めるのも外すのもギリギリできるくらいにピッチリと肌に密着しちゃってる。洗濯も二乃の担当だから、今度聞いてみよう。もしかしたら皆も服が縮んで困ってるかもしれないし。

「ふはぁ…やっど、外せた…脱がないと…」

ボタンを外すと次は脱ぐ動作に入らないといけない。二度目になるがこのパジャマは肌にピッチリ密着しているから脱ごうと思うと凄く大変。

「んぐっ！はぁ…ふんっ！」

ビリッ！

やっぱり。いつかは破れると思っていたからあんまり驚きは感じない。にしても、新学期早々からパジャマを破っちゃうなんて、少し不吉。でも破れた事で少し布に余裕ができたから脱ぎやすくなって助かった。

「ふう…ちょっと休憩しないと…んぐっ、ごくっ…ふはぁ…うぶっ」

パジャマを脱ぐだけでこんなにも汗だくになるんだから夏は怖い。特に今年の夏は猛暑だっていうから、ほとんど家の外に出なかった分、運動するとすぐに身体が火照ってしまう。休憩と水分補給を兼ねて、昨夜の飲みかけの抹茶クリームフラッペを手取る。昔は甘いのが苦手でこういうのは一切飲めなかったけど、今ではこの抹茶味のやつだけは飲めるようになって毎日飲まないと気が済まない。これだけの為に申し訳ないと思いつつ、今流行の出前サービスを利用させてもらってる。

「んっ…しょっと、制服、どこに仕舞ったっけ…」

再び膝に手をつき立ち上がる。学校に行くんだから制服を着ないわけにはいかない。クローゼットにかけられたハンガーから、制服とスカートがかかっているものを手取る。そしていつものセーター。暑くはなるけど、やっぱりこれを着ていると落ち着く。現在の時刻、7時35分。パジャマを脱いただけでもう10分も消費してしまったと思うと、ここからペースを上げていくしかない。

「んぐぐぐ…！おはっ、なんでっ！こんなに…！んぐっ」

夏服を着ようとして腕を通してみると締め付けがやけにキツイ。それだけならまだしも、こんな、前のボタンを締めるのに苦勞するほどこの制服って小さかったっけ、とそんな風に疑っても仕方ないくらいに胸からお腹にかけてボタンを留めるのに四苦八苦してしまった。結果、なんとか着る事はできたものの、まさか制服まで縮んでるなんて…。ボタンで留められていない布と布の隙間から、きっと肌が見えちゃってる。でもまあセーターは多少伸びるからそっちでカバーすればいい。

「すう…んぐっ！おはっ…身体、こんなに、固かったかな…」

ストッキングを履こうとするが、思うように手が足先まで届かない。息を思いきり吸って勢いよく手を伸ばす事でようやくストッキングの口を足に通すことができた。夏休みで家

に籠って姉妹とフータローを交えた勉強をしていただけて身体が固くなるなんて。今度ストレッチでもして関節を柔らかくしないと、そのうち生活に支障がでそう。

「…ぜえ、ふひゅ…疲れた」

ストッキングを伸ばしながら腿まで上げる。前だったらスッと通っていた気がするが、今日は疲れているからか時間がかかった。夏バテかな、やけに今日は面倒くささと身体の疲れを感じやすい。また座って休もうと思ったけど、時計を見て我に返る。休憩よりも早くしないと遅れちゃう。急いでスカートを履こうとすると、こっちも長さが足りない。自分じゃ上手く見えないけど、多分安全ピンとゴムが必要なくらい。

「ふう…んっく、はあ…やっど…」

まるで私が太ったみたいに全部の服が縮んでいたけど、なんとか着替えは終了。あとは歯を磨いて髪もどうにかしないと。締め付けの強い服で身を包んで、この熱気の籠った部屋から出ようとする。

「はふっ、せま、すぎ…ふう、ぜえ…」

ついこの前、身体を横にして通ると出入りがしやすいと気づいてから、私はドアを通る時はいつも横向きで通るようにしている。ノスッノスッと足音を立てて洗面所へ向かう。五つ子で、しかも年頃の女の子で暮らすとなると、家の広さは尋常なものじゃない。部屋から部屋の移動は場合によっては凄く長距離に感じた。

「三玖～、先にマンションの外で待ってるね！」

洗面所のドライヤーとヘアブラシでサッと髪を整えた後、歯を磨こうと歯ブラシを準備していると玄関から四葉の声が聞こえる。時刻は7時45分。そろそろ家を出ないといけない時間。

「うん、先に行ってて。すぐに追いつくから…」

あまり待たせちゃいけない。簡単に歯を磨いて後はマウスウォッシュの力に頼る。幸い、昨日は口臭が気になるような物を食べていないし、歯に挟まるようなものも食べていない。思えば最近炭水化物と飲み物、デザート系ばかり食べている気がした。気のせいかな、洗面台の鏡に映る顔は何処かむくれていて、パンパンというか腫れぼったい。特にむくんでしまうような寝方をした覚えはないけど、いつまでも気を取られていたら時間がどんどん過ぎてしまうので鏡を見るのをやめた。

ドスッドスッドスッ…

「ぜえ、ふっ、はふっ！んっ！ふう！んはっ…ぜえ、ふひゅ…」

部屋からカバンを持ち出してリビングに向かう階段を駆け下りる。ここ一年で胸が大きくなりすぎて足元が見えないのが階段を降りる時の悩み。ボールのように弾む胸で全身を揺すられて呼吸も乱されるし、何か物が落ちていたら踏んで怪我をしそうで。きっと最近フータローが私から少し目をそらしているのは胸が原因だと思う。いつも私が彼の方を見ると、彼は決まって顔を赤らめながら目を逸らすから。嫌われたんじゃないかとも思うけど、そんな反応が返されるようになったのは胸が邪魔で足元が見えなくなってきたところからだ

から、きっとそう。

「よい、っしょっと…ふう」

やっとの思いで玄関にたどり着くと、私の靴がもう用意されていた。きっと五月が置いてくれていたんだろう。夏休み前はこんなに準備に時間はかからなかった気がするけど…。二か月ぶりの登校で前の感覚が鈍っているだけに違いない。上手く見えない足元にふらつきながら、急いだ事で乱れていた呼吸を整えつつ靴を履く。このローファーも履くのは二か月ぶり。

ドスッドスッ、ドスッドスッ…

自分の部屋のドアを通る時のように、家から出る時も身体を横にして玄関を通る。うちの玄関からこの階のエレベーターは眼と鼻の先で、ちょうど私が家のカギを仕舞っているとエレベーターが着いた音がした。

「ぜえ…ひゅう…の、乗ります！」

同じ階に住んではいるけど面識はない、お父さんより一回り年上くらいのおじさんがエレベーターに乗り込んだ。ドアを閉じそうだったので、思わず声を出した。昔だったらこんなに大きな声、出なかったかもしれない。私がなんとか走ってそこにたどり着くと、おじさんの他に同乗者は2人しかいなかった。

「えっ…お嬢ちゃん、その…の、乗るのかい？」

おじさんに私は吐息交じりの声で「はい」と言いながら首を縦に振って返答する。息が上がってこれ以上声が出そうにないから仕方ない。私が乗り込むとエレベーターはずんっと沈み込んだ気がしたが、一人の女子高生が乗ったところで沈み込むエレベーターなんてない、これも気のせい。閉じた箱の中、高層マンションの30階から1階までは結構な時間がかかる。密室でありかつ、走ったのもあって蒸れて暑い。

「ふう、すう…ふう、」

誰かの呼吸音が密室内に広がる。私はあまりの暑さと汗の量に我慢できずにカバンからタオルを取り出して額に当てた。うわっ、凄い汗。さっきから一緒に乗っている人たちの視線を感じるけど、何か私に用なのかな。もしかして、汗が臭うとか…？

ピンポーン

なんてことを気にしながら顔や首、腕などの汗を拭いているとエレベーターはエントランスに到着した。現在の時刻はギリギリ8時前。今から走れば学校には間に合う。だからきっと姉妹の皆はマンションの前で待ってくれているはず。まず謝らなきゃと思いつつエレベーターから出ると、空気はさっきより新鮮で涼しいものを感じた。早く皆の所に行かないと。

「ぜえ、ぜえひゅう…みんなっ、ふうー、おまたせえ…」

ドスッドスッ…ドスッドスッ…

談笑しながらチラチラと時計を見ては時間を気にしていた4人に、私は精一杯の勢いで駆け寄って言う。あんまり走っても前に進まないのは多分私の運動不足。最後に家の外で走

ったの、いつだっけ。

「遅いわよ！アンタいつまで待たせ…げっ…！ちょ、ちょっとその身体！」

「ふう…身体…？私の身体に、何かついてる…？ふう…」

待たされた事に文句を言ってくるのかと思ったら、二乃は血相を変えて私の事を足元から頭の先までジロジロと見てくる。何か変なところでもあるのかな。

「三玖…そ、その服、私の勘違いかもだけど…多分このままだと…」

四葉も何かを言いたそうだけど、はっきりと何がどうなっているのかは言ってこない。服？身体？確かに制服はキツかったけど、これは洗濯で縮んだだけ…。

「少しいいかな…？はい、四葉と三玖で並んで～、2人とも身体ごと右向け右！」

パシャッ

四葉を私の隣に立たせると、カバンからスマホを取り出した一花はカメラアプリを起動させてすぐさまシャッターを下ろす。こんな時に写真なんて、私が待たせたから皆今日は遅刻しても良いと思っているのかな。

「一花、あまり現実を急に押し付けては…」

「五月ちゃんの言いたいことも分かるけど…。ここまで…大きく育っちゃったら、言葉で言うより実物を見てもらった方が早いからね…」

何の事か分からない会話を続ける姉妹たちに、私だけ仲間外れにされている気がして嫌気がさし始めていたが、一花は私にスマホの画面を向けてきた。

「あんまり驚かないでね。ここまで自覚がなかったのは凄く不思議なんだけど…こっちが四葉で、こっちが…」

画面に映るのは見慣れた妹の姿。スラッと伸びた手足にちゃんとメリハリのあるボディライン。明るい髪色が似あうショートヘアの私の妹。だけど、その隣に映るのは誰？背は変わらないけど、身体の厚みは見た感じで三倍近くあって太い。その割に小さい制服を無理やり着ているからお腹や腿は丸見えだし、ボディラインはほぼバツバツの服を着ているから丸わかり。体重まで想像するときっとテレビに出てるおデブタレントさんより重い。けどそんな人、ここに…

「もしかして…私…？」

無言で頷く一花、これは参ったと頭を抱える二乃、返す言葉を見つけられず思考回路が爆発寸前の四葉、慰めの言葉を脳内で探しつつも動きはしどろもどろしている五月。ほ、本当に私なんだ。嘘か本当か内心では疑いつつも、写真を見ながら自分の身体を触っていく。

ブニッ、ブヨン、ドツッ

制服とセーターを着ているはずなのに、お腹に触れた時の感覚はまるで自分の素肌に触れているよう。いつもお風呂で身体を洗っている時に感じるものと変わらず、肉の弾力がする…。胸は Y シャツのボタンを弾き飛ばしそうなほど膨らんでいるけど、他の人から見てそんなに危ない状態だったなんて知らなかった。

「ブ、ブヨブヨ…わ、私…太ってる…」

顔に肉がついて丸みを帯びた輪郭をしているけど、横を向いた写真を見ると首回りに二重顎が形成されていて、これが息苦しさの原因でもあったんだと気づく。カバンから顔を覗かせているヘッドホン、そして髪型からこの写真の人物が自分であることは、感触をもってしても明らかだった。隣に立つ四葉の胴体くらいはある太腿も、ストッキングがはち切れそうになりながら内部の贅肉が自己主張をしている。この肉の塊以外の何物でもない脚も、私の身体の一部…。こんな膨らむだけ膨らんでみっともない身体は、シルエットだけだともはや人というより球体。

(球体…?)

いつからか、姉妹もフータローも何も言ってこないから忘れていた事を思い出した。たしかだいたい前、太り始めた時にそんな事を考えて、ダイエットをしようと…。てっきり自分はもう太っていないのだと思っていた。皆私の体型に触れてこないし、きっと自分で自分の身体を見慣れてしまっていたから、太っていく自分の身体の変化に鈍くなっていたんだ。

「な、なんで…！皆知ってたの…！？」

思わず姉妹に問い詰めてしまう。贅肉だらけの身体でもがいていて、自分でもみっともないのは分かっているけど、全く予想もしていなかった出来事に動揺してしまった。

「し、知っていました…。ですが私たちはいつも一緒にいる為、“彼”に言われるまでは気づきませんでした…」

彼…もしかして…！肉の段が作られて埋もれているはずの背筋に寒気が走る。まさか私からいつも目を背けていたのも、やけに最近避けられていたのも…。

「で、でもフータローは何も…！」

「い、言うわけないですよ三玖、だ、だって…」

五月は私に向ける言葉を詰まらせる。少し間が空いてようやく…

「だって、私が彼に体重の事を言われた時にキツク注意してしまったんですから…！」

真っ赤な顔をしてプルプルと震えながら五月が打ち明ける。そっか、『女の子にそのような事を言うてはいけません！』なんて、よく食べる上に真面目な五月なら鈍感なフータローに言ってもおかしくない。きっとフータローはそれを気にして…

「そ、そんな…」

ブチッ、パンッ！パンッ！ビリリリリッ！

私は崩れるようにマンションの前で尻もちをついた。地面に肉厚なお尻がぶつかった勢いで私の身体を締め付けていた制服のボタンやスカートを留めていた安全ピンとゴムが弾け飛ぶ。更にそのまま脇から Y シャツの破れる音までした。ほとんど半裸に近い恰好になった女性、しかもその体型は巨大な乳房を付けたトドのような、そんな巨体が人の出入りが激しい朝という時間帯のマンション前で座り込んでいる。これが自分だなんて。

「ちょ、三玖！大丈夫！？…皆も三玖を中に運ぶの手伝って…！」

急に私が崩れるようにして倒れたのを見て一花が駆け寄ってくる。スマホが地面に落ちて液晶の割れる音がした。私の腕を重たそうにしながらも持ち上げて肩に回す。右腕は一花、

左腕は四葉。

「三玖…ごめんね、私をもっと早くに伝えていけば…」

まったく悪くないのに四葉が涙ぐんでいる。自堕落な生活を続けて太ったのは私なのに。それからはあんまり記憶が確かではないけど、一花と四葉に連れられてエレベーターに乗って…。

§ § §

「どう三玖、少し落ち着いた？」

さっき家を出たばかりだというのに、午前 9 時を回った今もなぜか私は自宅のお風呂にいる。お風呂場と脱衣所を隔てるモザイクかかった半透明のドアの向こうからは、マンションの入り口で放心状態になりかけた私を家まで連れ帰ってきてくれた一花の声がする。

「うん、だいふ。…私、こんなに太ってたんだね」

長女の心配がこんな時は凄くありがたい。鏡にお湯をかけると、シャワーを止めてそこに映った巨体に私は目を向ける。へそを境目に、背中から続く肉の段が 2 段。へそ上の 1 段目は、ボウリングの球のように重くそしてだらしなく垂れた大きな胸でほとんど隠されているから、そんなに大きな段に見えない。私の視界を遮っていたこの巨大な胸がまさかへそ上まで隠していたなんて。下っ腹はそんな 1 段目の肉段よりもおっきくて、見る人によっては水風船だったりクッションだったり例えられそう。脇腹からダルンと垂れたお腹のお肉で、ただ立っているだけだと恥部は全然見えない。痩せている人にはあり得ない光景、間違いなく私以外の姉妹にこんな贅肉は付いてないだろう。

「ごめんね、三玖。もっと私たちがちゃんと三玖の事、気にかけてあげられてたら…」

謝罪の言葉は一花が言うべきじゃない。私を家まで連れ帰った後、四葉は学校に行った。今ここにいるのは私と一花だけで、他の姉妹がいないからか、一花の声は若干幼い気がするし震えてる。

「ううん、一花たちのせいじゃない。私が勝手に怠けて太っただけだから…」

私は徐に自分のお腹に手を伸ばす。何一つ衣服を身に付けていない全裸の状態、シャワーと汗で濡れてしっとりしている肌は、鷲掴みをすると指が沈み込んだ。

ブヨッ、ブニョン…

この一年で溜め込んだ脂肪。痩せようと思っていた頃のぽっちゃりしていた姿を思い出しても、その頃とは打って変わって、分厚く狂暴な贅肉が私の身体を包んでいる。中学校の卒業アルバムや林間学校、修学旅行の写真にいる私と比べたら、きっと同一人物とは思われないくらいの激太り。

ブヨッ、ドブッ、ドツッ

鷲掴みにしたまま持ち上げたお腹のお肉を、手を離して一気に解放する。重力に勝てるはずもなく、肉の山はパンパン膨れ上がった太腿の肉とぶつかって僅かにバウンドした。昔の

私のウエストよりも太い脚は、座ってばかりで脂肪だけでなくむくみも溜め込んでいるだろうお尻に繋がっている。

ブルッ、ブルン

鏡にお尻を向けようと少し動くだけで、巨尻はただ波打つように震える。こんなお尻じゃ、学校で席に着くのに椅子が2つ必要になりそう。

「三玖はさ、もうフータロー君がこの事気づいてるって…」

「うん、知ってる。さっき五月が言ってたから。フータロー、最近私と全然顔を合わせてくれないと思ってたけど、これじゃ仕方ない…」

去年の夏だったらおじいちゃんに会いに行ったり、どこか出掛けたりして、ここまで太る前に自分の身体の事を知れたかもしれない。けど今年は五月の受験や、私もバイトから離れつつあって全然気づけなかった。唯一私の変化に気づいてくれたのがフータローだけだったなんて。

「仕方なくない！三玖はどんな見た目でも三玖で…私たちの大切な姉妹だもん」

一花の声が上ずっている。たぶん今はこの言葉を飲み込むだけで、何も言っちゃいけない。鏡に映るこの女の子は、太っている子が好きな男の人には好かれるかもしれないけど、そうじゃない人から見れば引かれるくらいの体型。まだ高校生だっていうのにきっと体重は150キロ以上はある。それでも姉妹だと、大切だと言ってくれた姉の言葉が心に刺さった。

「だからね、三玖…自信を持って。いつだって、私たちは五つ子でお互いの味方だから」

自信、昔の自分にはなくてフータローと出会ってから育ててきた気持ち。そして今なくしかけていたもの。

「それとね、これは二乃からのメール。『アンタに貸すのは今日だけ。明日からは私が彼にアタックするんだから、今日中に甘えておくことね！』だって。そっか…、うん。じゃあ私もそろそろ行くね。…三玖、応援してるよ」

急に二乃から送られてきたメールを読み上げる一花に一瞬私の頭が混乱する。

(貸すって、何を…？彼？まさか…)

そう思った時には、もう遅かった。

「はぁ…！はぁ…！三玖！大丈夫か…！」

ドタバタと廊下を駆けてきた足音が止まると、明らかに息を切らしていきそうな声が脱衣所から風呂場まで響く。その声は壁越しでも私には誰のものかすぐに分かった。

「ふ、フータロー…なんで」

「はぁはぁ…なんでも何もあるか！お前が倒れたって五月から聞いて…はぁ、お前に何かあったら…俺は…！」

遅刻ギリギリで登校した五月がフータローに事情を話し、そして朝のホームルーム直後に教室を飛び出して行った彼を見て二乃が一花にメールを送ったんだろう。でもこんな身体、もしフータローが知っていたとしても、こんなに太ってる私を見られるなんて…。

「フータローはこんなブヨブヨな私の事、嫌で、見てられないから避けてたんだね」

彼が私たち姉妹に「嫌」なんて言えるわけもないのに、私はなんでこんな意地悪な事を言ってるんだろう。ずっとフータローの事が好きだったのに、想いを伝えられずに情けなく太った自分に絶望したから…？それとも、フータローと付き合える可能性を私の中から今、私自身で否定したから…？

「そ、それは…」

ほら、回答に困らせてしまった。私の言葉が彼に迷惑をかけているのだ。1年間の付き合いで人間として成長した部分と、私の中に昔から巣食う悪魔の部分が拮抗している。

「私ね、こんなに太ったんだよ…フータローにも、見せてあげる」

心では酷いことを言っていると分かっているのに、身体が、口が勝手に言葉を発して動いてしまう。半透明のドアを開き、脱衣所に立ち尽くす彼の腕を掴んでこちらに引き入れる。彼の着ている夏服の Y シャツに私の身体から落ちる雫でシミが作られていく。気づけば私は彼を押し倒し、馬乗りになっていた。

「ほら、見て…こんなにお肉が付いちゃったんだ…」

彼の制服の上ののしかかり垂れて広がった腹肉を一心に持ち上げて手を離す。当然肉は彼の上に再び落とされ、下腹部を刺激する。醜く太った身体をこんな形で人に強調して見せるなんて愚行でしかない分かっているのに。

次いで彼の顔の真横に手をつくると、膨れ上がった二の腕をタプタプと振るわせる。うっすらと肉の段から解放された脇は汗の溜まり場になっていてきつと臭い。でもフータローは驚きの余り見開いた目のやり場に困っているだけでなにも言わない。そうだよ、こんなおっきな胸、見たこともないもんね。男の人の両手でも収まらないくらいのおっぱい。しかもそれが2つも生まれたままの姿で視界を占めていたら、フータローみたいな男子高校生なら困って当然。

「どう、フータロー…こんなに太った私に幻滅した、よね…」

時間が経つにつれて、自分が何をしているのかを理解し理性が働き始めていく。ずっと好きだった人を無理やり風呂場に連れ込んだ挙げ句、脂肪に塗れて太りきった身体を見せつけるなんて最悪だ。もう、私の恋も青春も何もかもが終わったのだ…。

「ち、違うぞ三玖…俺は別にお前の事が嫌いなんじゃなくて、だな…」

思っていたのとは違うリアクションに戸惑う。きっと「早く退いてくれ」とでも言って私から離れるのだと思っていたのに、目の前の思い人は耳まで真っ赤に染めて、私の予想していなかった事を言う。

「お、俺はな…お前の、三玖の事がずっと気になってたんだ、会う度にお前が変わっていく、昔は根暗だったのがだんだん口数も増えて…それだけじゃない。だんだん丸くなっていくお前を見ると、放っておけないと言うか、こう…胸が…」

珍しくフータローが言葉をつまらせる。無理に私を慰めなくてもいいんだよ…。裸の私なんか興奮するわけないのに。こんなブヨブヨな贅肉で包まれた身体が良いわけないのに…。大きな二段腹、生活に困るくらいの胸、ストッキングを内側から破っちゃうくらいに膨

らんだ太腿、だらしなく垂れたお尻、それに丸々とした輪郭に二重顎の私なんて…。

「だから、俺は…お前の事が好きなんだ。ずっと自分の気持ちに背いて誤魔化してきたけど、今日ここに走ってくる途中で気づいたよ。俺は三玖の事が好きだ、お前を気にせずにはいられない」

私が頭の中で想像していた彼とは正反対。もっと酷く無関心に私の事を突き放すと思っていたのに。ずっと聞いたかった言葉が、こんなタイミングで…。フータローは、ずっと優しく私の…。

「私も好き…ずっとずっと好きだったよ…！」

込み上げてきた涙を隠すこともせず、思わず全裸のまま彼の上に覆い被さる。ずっと彼は私を見てくれていた。それは1年前も今も、それに痩せていた頃も太ってからも変わらず。ずっと足りなかったのは私が思い切って行動する勇気だけだった。

上半身の肉が彼の身体を包み込むと、溢れた脇腹の肉や横乳は床に着いていた。このまま彼と重なっていたい。そこから私たちは数分の間、動こうとはしなかった。

### 第三章(終) 肉結びの伝説 2000 日目

「…きて、起きてフータロー」

現在の時刻、午前6時半。桜も散ってからだいぶ経ち、世間はゴールデンウィークの話で賑わう季節。でも私と彼の間での最近の話題はそんな大型連休の事ではなく、もっとプライベートなものである。

「…ん、ふぁ〜、おはよう三玖」

「おはよう」

左耳から囁かれる“彼女”のモーニングコールにやっと目を覚ましてくれた。キングサイズ以上の大きさのベッドに二人。それじゃないと二人で寝るのに私の身体が収まらない。

「…ん、まだ2時間早いんだが、起こす時間、間違えてないか…？」

ベッドの横の棚に置かれた時計を見て、彼は尋ねる。布団を退けて時計を覗き込む彼の身体は20代前半の男性らしく、ほどよい筋肉量で腹筋がうっすらと割れている。きっと体脂肪率で言うと10%くらい。私の8分の1の体脂肪率しかないだろう。

「うん、今日は大切な日だから、フータローと朝シャワーしたくて」

私も自分の身体にかかったタオルケットを退ける。4月末なのに気温は25度近くまで上がったこともあって、昨夜は暑くてほぼ裸で寝てしまった。ベッドに横たわる鏡餅みたいな身体の私を見ると、案の定フータローは真っ赤になる。いつまで経ってもむっつりというか、ダイレクトな攻めには弱いんだね。

「そ、そうか…じゃ、じゃあ今日だけは特別だからな！一緒に入るのも…」

「起こして、ほしいな」

立ち上がって一足先にシャワールームへと向かおうとする彼の手を掴む。同棲を始めて半年、フータローの考えていることは長い付き合いからも手に取るように分かり始めたし、

ここには姉妹がないから遠慮なんてなし。

ゆさっ、ブルンッ

さっきまで密着していた肌と肌が、タオルケットもなくなった事で自由になる。フータローのハートを落とすには、こうやって、胸かお腹のお肉を揺すってアピールすれば良い。なんて、ちょっと悪魔的だけど、これも私たちの関係が続けられている秘訣の、コミュニケーションの一つ。

「お、おう…じゃあ手、引っ張るぞ」

彼が私の汗で湿った手を取る。角張ってて大きな手に、私の肉まんみたいな手が包まれる。普段もベッドから起き上がる時は手伝ってもらってるのに、今日だけはなんだか新鮮な気分。

「ふんっ…はふっ…んっ、しょっと」

フータローの引っ張る力に乗せて、身を起き上がらせる。そしてその勢いそのまま立ち上がると、若干息切れを起こしそうになりつつも、立ち上がるのに成功した。

「私の寝てた跡、凄くおっきいね。フータローの3倍くらい」

「3倍はないだろ、そうだな…背は俺の方が高いから単純な面積で言うと2.5倍か」

「もう…ほんとに細かいね、それがだいたい3倍だって言ってるのに。…ふふっ」

手を握ったままで、ベッドシートにできた身体の跡について話す。私の寝ていた所はシートだけじゃなくてベッドごと沈みこんでそうだけど、あんまり気にしない。寝汗も吸ったみたいで湿ったシートも、昔だったら臭くないかと不安だったのに、もう今じゃ、彼が私の汗っばくたまに臭う身体の匂いを受け入れてくれたのもあってそのままになってる。

「シャワー、浴びるか」

ふとフータローの方から本題を切り出す。半裸の男女が2人寝室にいる時間も終わらしい。

「扉、通れるよな？」

全身の肉が一步踏み出すと連動するかのように揺れる私の方を振り返って、前を歩く彼が尋ねる。

「大丈夫だよ、横向きで通れば…ちょっとつかえるけど」

もう高校生の頃から続けてる習慣で、私は扉の前に身体を横に向け通過を試みる。つかえるのは決まってお尻と下っ腹。スリーサイズは胸がダントツで大きいけど、お尻とお腹の存在感には勝てないらしい。

「ぜえ…ふんっ、もうっ、すこし…！ふはあ…ふう…」

ブニュ、ドプッ、ブニュニュニュ…ドップン

壁が一瞬私の身体にめり込むけど、少しだけお腹を引っ込めて動けば何とかまだ通れる。

「と、通れたみたいだな…」

鼻の下を伸ばした変態がこっちを見て言う。彼が私たちの家庭教師として現れなかったら、きっと今の関係はない。

ドスッ、ドスッ…ブニュ、ドプンッ

内腿の肉が邪魔で、がに股歩きになりつつ、一步一步を踏み出す。揺れる贅肉は足の着地から太腿、下っ腹、お尻とお腹、胸にきて顔の肉の順で。

「はひゅ…ふうっ、ぜえ、ひゅう…」

たった数メートルの移動なのに、シャワーを前にしてもう息が上がって身体が汗でコーティングされている。私が歩いてきた床は所々水滴が落ちて濡れていた。

「じゃあ、入ろうか…」

フータローがお風呂場の扉に手をかけるが、私にはその前に彼としたいことがあった。

「ふ、フータロー…ぜえ…ふう…体重と…身体、測ろっ…？」

パンパンに肉の詰まったソーセージみたいな指とそれが並んだ手で額の汗を拭いながら、私は彼に言った。体重もスリーサイズももう半年くらい測ってない。それこそ、半年前に同棲を始めて以来かも。

「いいのか…俺がその、三玖の身体、そんなに触っても…」

当然だけど私一人じゃ体重計に乗るならともかく、スリーサイズを測るのなんて不可能に近い。彼の協力は必要不可欠だ。でもやっぱり彼は鈍くて、紳士と言えば紳士だけどもあんまり攻めてはこない。

「何言ってるの、もう沢山触ってきたじゃん、私の。それに…フータローだから良いんだよ」

彼の手を引っ張り、胸に近づける。内心ドキドキしてるこの心臓の音、手から彼に伝わっちゃいそう。

「…そう、だな。分かった。メジャーは確か…あった！体重計は洗濯機の横だよな…」

胸に触れる寸前で彼は本能に背き、手を離す。もう少しこのままでも良かったのに残念。でも私がゆさゆさと身体を揺らしている間に、彼はメジャーも体重計も用意してくれた。

「胸から…お願い」

乳房があんまり見えないように片方の腕で隠していたけど、やっぱり最初は胸から測ってほしかった。

「いいんだな…じゃあ…」

背中から脇の下を通してフータローの顔が私のおっぱいの近くまで寄る。一人じゃうまく洗えない脇の臭いがきつとその辺を漂っている。大きくなるだけになって実用性が全くない胸は、呼吸の度に膨らんでは少し萎んでを繰り返すだけで他に何もできない。メジャーが左胸から右胸に移っていく感覚。あんまり乳首の周りは可愛くないから見ないで欲しいと思っていると、肩の高さまで持ち上げてプルプル震えていた私の腕に彼が触れた。

「…終わった」

「…何センチ？」

「…2m16cm」

いくら背が高い人でも、巻き付けば私の胸周りの方が大きいなんて、やっぱりこの胸は凶悪。フータローと付き合ってからではできるだけ健康的な太り方を目指してただけあって、あんまり大きくなりすぎてはいないけど、このサイズは十分規格外だと自分でも思う。

「…お腹、持ち上げるね」

鏡餅の1段目と2段目を分けるかのように、私は脇腹から脂肪をかき集めてへそ上の肉を持ち上げる。両腕の脂肪に包まれたか細い筋肉を使っての重労働だから、普段は絶対しない。お肉の段と段の間だって、いつもは手洗いとそのあとタオルで拭くくらいだから、たぶんしっかり持ち上げたら、顎になったお臍の周りはいくらもいい匂いがしない気がする。

ブニュ、ブニュッ

埋もれていたウエストのラインに彼の手が触れていき、肉の間にメジャーを挟み込んでいる気がする。私の中ではしっかり全部のお肉を持ち上げている気になっていたけど、多分全然贅肉だらけ。下っ腹にフータローの鼻息がかかるとなんだかこそばゆくて興奮する。声は出さないようにしても、身体から出る汗は止められなかった。

「もう楽にして良いぞ」

彼の一声でなんとか持ち上げていた腹肉から手を離す。

ドップン、デブンッ

たった数秒のことなのに、自分の身体に付いた贅肉をちょっと持ち上げるだけで限界に達する。彼が指し示す目盛りの数値は182cmだった。これも一般人にとっては規格外の数値。私の身体はやっぱり膨らんでいる。

「お尻も、いいよ…」

次が最後、だけど一番大変。風船みたいに膨らみながら垂れているお腹の肉を下っ腹から持ち上げる。一番蒸れるし恥ずかしい所を彼にこうして見られるのは、やっぱりまだ慣れないけど、今日だけは頑張りたい。指をお肉に沈みこませて一心に持ち上げる。

ブニュン、ブヨッ…

「ぜえ…ふんっ、おもっ、いい…ふひゅ、ふうっ、ふはあっ…！」

一気にマフィントップから下に空気が流れる。いつもは出さないくらいの声と吐息をただお腹を持ち上げるだけなのに我慢ができなくて溢れさせてしまう。フータローのメジャーが恥部付近を擦れる度に出そうになる声を必死に抑えながら、まだかと測り終える時を待った。

(お願い、汗、止まって…)

ポツリ、またポツリと汗が肌から離れて落ちていく感覚。湿っていく床が全部自分の汗によるものだと思うとドキッとした。

「三玖、お疲れ様」

ドップン、ダポッ、ブヨン…

「はあはあ…！ふう、ふはあっ…！」

お腹から手を離すとさっき以上の揺れが全身に伝わる。二重顎のせいもあってほとんど

吸えていなかった酸素を思いきり吸い込み、肺に届ける。床にはたぶんお腹の贅肉から飛んだであろう汗の飛沫が広がっていた。

「上から 216,182,191、また大きくなったな…」

どれも普通の人には縁遠く、想像もつかない数値で私の身体がどれだけ怠惰の結果として贅肉を付けたのかを物語っている。そうだ、フータローと同棲を始めて、最初の夜に測った以来のスリーサイズ測定だった。けど、私と彼にとってはそこまで意外な大きさと言うわけでもない。7年間の付き合いと半年の同棲があれば、だいたい前回の数値と合わせてみて今の身体の大きさも予想が付く。

「うん…きっと、フータローと一緒にいれて、幸せだからだよ」

「ふっ、幸せ太りか…じゃあ俺も太ってないのはおかしいな、お前と居られてこんなに毎日幸せなのに」

こんなこと言うのは凄く照れるし恥ずかしいけど、今日なら言える気がした。するとフータローも同じように隠せてない照れ隠しをしながらボソツと言う。なんだかんだ私たちは似ているんだ。

「体重計、乗るね」

「おう…なあ三玖、大切な事だからもう一度言うぞ。…俺もお前といれて幸せだよ」

軋む体重計の音なんて気にならない。台に乗ったことで彼との身長差が縮まって、顔と顔の距離が近くなる。いつ見ても彼の顔はかっこいい。別に顔に惹かれたわけじゃないけど、いつも優しいところだったり私たちを助けてくれるところだったり思い返してみても、やっぱりこれからもこの人と一緒に居たいと思う。

「うん、私もフータローと居れて幸せ。大好きだよ」

「「これからもよろしく」」

体重計に 200 キロを超えた数値が表示されたときには、私たちの唇は一つに重なっていた。午後には結婚式があるけど、ちょっと早めの誓いのキス。肌と肌が触れ合っては私の身体に彼が包み込まれていく。太り始めた頃は不安で、それもいつの間にか忘れてブクブクと太り…、まさか今、彼とこうして過ごせているなんて夢にも思わなかった。

今までは大してフータローの為に何かできたわけでもなく、逆にいつも支えてもらってばかりで、だから、だから…。

(だから、今日からは貴方だけの花嫁として精一杯尽くすからね。もう、この気持ちに我慢はしないよ)

この後 2 人で入ったシャワールームでの話はきっと誰にも言わない秘密。私と、私の夫だけのナイショの話。

Fin